2019年11月18日
発行：あ・そうかい運営委員
企画・編集：ASOUKAI編集部
あ・そうかい会報　第19号

あ・そうかい通信

Vol.19

第3回「あ・そうかい文化祭」は大成功
文化祭、パワーアップ!!

『いくつになっても大騒ぎは楽しい』打ち上げ

「ああ、楽しかったなあ！」というのが全員の思いだったに違いない。11月4日、麻生市民交流館やまゆりで開かれた「あ・そうかい」文化祭。3度目の今回は、これまでにない大盛り上がりのうちに終わった。

この日、やまゆりに集まったのは、会員以外も含めて70人以上。これはもう「大成功」と言っていい。

盛況の理由はふたつあった。ひとつはやまゆり開催の実現。もうひとつは内容の充実だ。ことに初参加組が光った。タイムリーだった「HAKA」。「菊地剣友会　翔竜演舞隊」の迫力満点の殺陣。一方、「関東ことり組」のコント、@からおけ三人組の朗読落語は大爆笑を巻き起こした。

常連組も負けていなかったのはもちろん。12の演目すべてが上出来だったのは、途中で客席を立つ姿がまったくなかったことが証明している。

そして誰もが感じたのは「いくつになっても大騒ぎは楽しい」ということだったのではないだろうか。年に一度、みんなで騒いで楽しめば、体と心にエネルギーがみっちり充電されること請け合い。

さあ、来年はどこまでパワーアップするだろうか。

殺陣

日本舞踊

英語の唄

朗読

創作芝居

漫才

落語

バンド演奏

朗読＆唄

朗読落語

コント

撮影：植木昌昭・斉藤和彦

●当日のプログラム●

①HAKA（HAKAを楽しむ会）
②殺 陣（吉田英雄グループ）
③創作芝居（山浦弘靖）
④日本舞踊（@日本舞踊の会）
⑤英語の唄（@異文化交流）
⑥バンド演奏（SS Family Band）
⑦漫 才（U＆M）
⑧朗 読（松崎朝子）
⑨朗読＆唄（井口＆ナカジー）
⑩コント（関東ことり組）
⑪朗読落語（@からおけ）
⑫落 語（南亭八ッ太師匠）

魚眼・複眼

世界に類をみない超高齢化社会が進んでいる「日本」は、航路が見えない海図を進んでいるようだ。

江崎禎英（著）の「社会は変えられる」には、我々の指針になる一文がある。「疲れた中年のサラリーマンと、寂しく余生をおくる年寄りの姿を見せながら、若者に夢を持てという方がどうかしている。

最期まで楽しく生き生きと過ごすシニアの姿を実現することこそ、我々が目指すべき目標なのです。そのためには、大きな時代の節目において、次の時代を牽引する、新たな『幸せの形』を見つけることが、この時代に活きる私たちに与えられた素晴らしいテーマです。

つまり、社会的存在として生き、楽しみながら健康づくりを実現している姿は、2周目の人生が決して『余生』でないことを示しています。」

われわれ「あ・そうかい」には幸運なことに、個性あふれ・超ポジティブなメンバーが多く、この「幸せの形」に、答えを出せるのではないでしょうか。（U）

船上日記

↑好きな風景

植木昌昭

8月4日から15日にかけて、ダイアモンド・プリンセス号に乗船して「日本四大祭りツアー」に参加してきました。

何故クルーズか？というと、第2の定年（講座などで話した75歳）を迎えるに際し、何もしない、何も連絡がこない、【空白の時間】を持ちたいと考えたからです。

それでは、ざっと船旅を紹介したいと思います。

●乗船まで

船旅ではドレスコードがあり、荷物は予想外に多くなりますが、宅急便を利用すれば船室まで運んでくれ、以降、旅行中、荷物を移動する必要がないのでシニア向きです。巨大と聞いていましたが、見上げるとやはり迫力十分、横浜から乗船しましたが、外国船なのでパスポートが必要。部屋は色々なタイプがありますが、船内に大きな展望風呂があるので「シャワーのみ・海側バルコニーつき」のタイプにしました。

↑ドレスコードはジャケット着用

●乗船してから

最初の頃は、船内の移動は前後・左右・上下がわからないので、船内地図を手にないと迷子状況で、やっと下船のときに客船の概要を把握できた有様でした。

水平線に沈む夕日の姿など、いろいろな風景を眼にしましたが、私が一番好きな風景は船尾から航跡を眺めることでした。その心情を俳句にと思いましたが、力及ばず、同人が句にしていただきました。

航跡に来し方思ふ夏の海（井口南柳）

歳月もかくて過ぎけむ夏の水脈（みお）（佐藤藍良）

↑見上げると巨大

↑船内の吹き抜け

会員さんからの「お薦め」情報

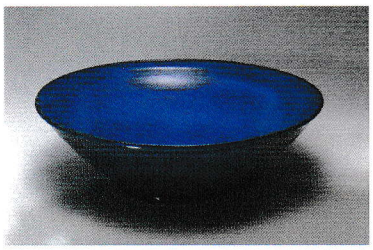
私のいっぴん

岩田　輝夫

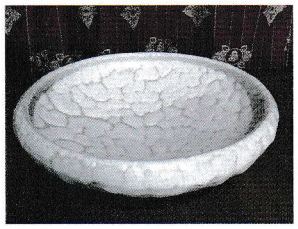
私は33歳の時に横浜市青葉区寺家町にある野中先生の陶芸教室に行きはじめました。なので焼き物を作りはじめて、何ともう43年になります。横浜市の中学校の教員をしておりましたので、土曜の午後、部活のない日や、日曜午前の部活後に陶芸教室に通ったりしておりました。

50歳の時に長野県にある山荘の隣に自分で丸太小屋を作り、そこに電気の窯を設置して初めて自分の窯を持ちました。現役の時は十分に作陶ができませんでしたので60歳で定年退職をして再就職をせずに作陶に没頭しました。

今までに１０００点以上の作品を作りましたが、そのなかから今は亡き野中春甫先生からも褒められた作品で、自分でもよくできたと思っている作品を紹介させていただきます。酸化なまこ釉鉢と白マット釉鉢です。



海鼠釉大鉢（41×41×13）



白マット釉鉢（25×25×8）